

乳ガン患者の入院カルテより —最初の症状に気づいてから入院 までの期間とそれにかかわる要因

県立中央病院 宮内 美紀子(16回生)

田村 真紀子(中央病院)

高知女子大学 近沢 範子(20回生)

©森田 芳子(22回生)

1. はじめに

近年、日本人の胃ガン、子宮ガンの死亡率は年々減少してきているが、乳ガンの死亡率は徐々に増加する傾向にある。

高知県では、昭和50年より対ガン協会が中心に乳腺集団検診を始め、乳ガンの早期発見、早期治療に努めている。しかし、年間に検診で発見される乳ガン患者は全体の10%ほどで90%は自分で異常に気づき受診している。

臨床の場で我々が患者と接する時、なぜこんなに大きくなるまでしこりをほおっておいたのか、と思うことがある。しかし、これまで、その人達が異常に気づき、受診し、入院するまでの経過にはあまり目を向けずに看護していた。

今回は乳ガンで手術を受けた人達を対象に入院するまでにどのくらいの期間を要し、それにはどのような要因が関係しているのかを知りたく入院カルテという非常に限られた情報の中からだが調べてみた。

2. 方法

対象：A県立病院で昭和40年12月から昭和51年12月までに乳房切断術を受けた乳ガンの女性患者300人中113人

方法：入院カルテより、①最初の症状に気づいてから初診までの期間、(初診とは、A県立病院初診とは限らず最初に受診した医療機関をさす) ②初診からA県立病院、入院までの期間、①②それぞれと、年齢、職業、学歴、保険の種類、既往症の有無、入院時乳ガン以外の治療中の疾患の有無、最初に気づいた症状との関係をみた。

3. 対象の特徴

113人の年齢は表のように40才代が最も多く次に50才代、30才以下、60才代となっ

ている。乳ガンの好発年齢は40才代から50才以上となっており、対象として大きな傾りはみられない。

| 年齢 | 39才以下 | 40～49 | 50～59 | 60～69 | 70才以上 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 113 | 21 | 36 | 29 | 19 |

学歴、職業、結婚は表の様であった。113人中66人(58%)はなんらかの仕事をもっていた。

| 職業 | 専門事務 | 販売従事 | 農漁業 | 技能 | サービス | その他 | 主婦 | 不明 |
|-----|------|------|-----|----|------|-----|----|----|
| 113 | 21 | 14 | 18 | 8 | 3 | 2 | 35 | 12 |

高知県の女性労働者数の平均は44%で対象は14%ほど高い値だった。

| 学歴 | 初等 | 中等 | 高等 | 不明 | 結婚 | 未婚 | 既婚 |
|-----|----|----|----|----|-----|----|-----|
| 113 | 40 | 49 | 6 | 18 | 113 | 10 | 103 |

4. 結果および考察

表 1 最初の症状

| しこりあり 102人 | | | | | しこりなし 6人 | | | その他 | 不明 |
|------------|-----|-----|----|----|----------|--------|-----|-----|----|
| しこりのみ | かゆみ | 肩こり | 痛み | 変形 | 血性分泌物 | 非血性分泌物 | びらん | | |
| 86 | 3 | 6 | 6 | 1 | 2 | 2 | 2 | 3 | 2 |

最初に気づいた症状は表1

のように、しこりにふれた者が102人(90%)を占めていた。分泌物、びらんを認

表 2 最初の症状に気づいてから初診までの期間

| 1週間以内 | 1週間～1ヶ月 | 1ヶ月～6ヶ月 | 6ヶ月～12ヶ月 | 12ヶ月以上 |
|-------|---------|---------|----------|--------|
| 39 | 44 | 15 | 5 | 10 |

めた者は6人で、全身の倦怠感などを訴えた者は2人、検診で発見された者1人、はっきりした記載のない者は2人であった。対象者のほとんどが自分で乳房の異常に気づき受診しているが、定期的に乳房の検診をしていた者は1人だった。彼女は小豆大のしこりに気づき受診し乳ガンと診断されている。他の人達は、「何気なく」「入浴中」「テレビを見ていて」「胸に物がぶつかり手をもっていきしこりに気がついた」など、日常生活の中で偶然しこりに気づいている。その中には、4×4cmの大きさになるまで痛みなどの症状もなく気づかなかったケースもあった。自分のからだのことは、よくわかっているようで以外に知らず、痛みなどの症状がなければ、その変化にはなかなか気づくことができないようである。

最初の症状に気づいてから初診までの期間は、表2のように1週間以内39人、1ヶ月以内83人(73%)と、約 $\frac{3}{4}$ の者は1カ月以内に初診にふみきっていることがわかった。しかし1年以上放置していた者も10人おり、そのうち3人は初診までに4年以上かかっている。京都第一赤十字病院、安住氏の調査によると、同赤十字病院乳ガン患者のうち、自分でしこりに気づい

てから1週間以内に受診した者13%、1カ月以内23%、6カ月以上が44%と報告している。A県立病院と比較すると、初診までの期間はA県立病院が3倍以上高い値を示し、かなり早い受療行動がみられた。安住氏の調査は、しこりに気づいてから同赤十字病院初診までの期間とも考えられる。それに対して、今回の調査はA県立病院初診とは限らず、初めて医療機関へ受診するまでの期間としたため高い値を示したと考えられる。

最初の症状に気づいてから初診までの期間と年齢、職業、学歴、保険の種類、既往症の有無との関係をみたが有意差はなかった。1カ月以内に初診した者のうち59人はしこりのみで初診しており、20人はしこりの他に、痛み、圧痛、肩こり、変形などの症状があり受診していた。初診までに1カ月以上かかった者は、しこりに気づいても他に自覚症状がないのでそのままにしておいたといひ、「しこりが大きくなってきた」「痛みがでてきた」「変形している」などの変化に気づき受診している。

また、最初に気づいた時の

表3 発見時のしこりの大きさと初診までの期間

| しこりの大きさのわかっている者32人についてみると、表3のように、しこりが大きいほど初診までの期間が短い | 1週間以内 | 1週間 1ヶ月 | 1ヶ月～ 6ヶ月 | 6ヶ月～ 12ヶ月 | 12ヶ月以上 |
|--|-------|------------|-------------|--------------|--------|
| T1(0~2) cm | 9 | 5 | 2 | 0 | 4 |
| T1(2.1~5) cm | 4 | 6 | 1 | 1 | 0 |

傾向がみられた。発見時のしこりの大きさが受診への動機づけの1つとなると思われる。しかし乳ガンの予後は、原発腫瘍の大きさとも関係があるといわれ、しこりの大きさから10年生存率をみるとT1(0~2cm)では80%前後の生存率が、T2(2.1~5.0cm)では50%前後にさがっている。しこりを発見し早期に受診しても、その時のしこりの大きさが2.1~5.0cmでは早期治療とはいえないと思われる。

これらの結果より、初診までの期間は1ヶ月以内が73%と比較的早いことがわかった。そして、年齢、職業、学歴、既往症の有無、保険の種類は、初診までの期間と関連がみられなかった。最初に気づいたしこりが大きかったり、痛み、肩こり、変形といった症状のある者は1ヶ月以内に受診している傾向にあり、1ヶ月以後に受診した者は、ほとんどがしこりを発見した時には他に自覚症状がなく放置し、痛みやしこりが大きくなるなどの変化に気づき受診していた。しこりがあるというだけでなく、それが大きかったり、痛みなどの症状が受診への動機づけの要因となると考える。今回の調査では、初診時の診断や、ガンの進行度などはわからないのではっきりとはいえないが、しこりが大きかったり、痛みなどの症状が加わることは、ガンが進行する可能性を含んでいると考える。

乳房の自己検診法の普及や、乳腺集団検診をすすめる中で、早期発見への指導を行い、また、乳ガンの知識の普及により、最初の症状に気づいてから初診までの期間をできるだけ短くし、

早期治療に結びつくような指導が必要と思う。

次に初診から入院までの期間をみると、1ヶ月以内64人、1ヶ月～3ヶ月17人、6ヶ月以上の人25人いた。初診から入院までの期間と、年齢、職業、学歴、保険の種類、既往症の有無、入院時乳

表4 初診までの期間と入院までの期間

| 入院までの期間 \ 初診までの期間 | 1ヶ月以内 | 1ヶ月～6ヶ月 | 6ヶ月～12ヶ月 | 12ヶ月以上 |
|-------------------|-------|---------|----------|--------|
| 1ヶ月以内 | 44 | 11 | 4 | 5 |
| 1ヶ月～3ヶ月 | 14 | 2 | 0 | 1 |
| 3ヶ月～6ヶ月 | 4 | 2 | 1 | 0 |
| 6ヶ月～12ヶ月 | 8 | 0 | 0 | 1 |
| 12ヶ月以上 | 13 | 0 | 0 | 3 |

ガン以外の治療中の疾患の有無の関係をみたが、有意差はなかった。

表4のように、最初の症状に気づいてから初診までの期間が1ヶ月以内だった者のうち21人が入院までに半年以上かかっていた。その21人を見ると、初診時は異常なものではなく、「悪性ではありません」とか「心配いりません」「乳腺症です」などといわれ安心して放置したり、乳腺症の治療を1～2週間行いそのままにしており、そのうちにしこりの増大や痛み、変形といった症状があらわれて再び受診している者が10人いた。また「ガンではありません」「心配いりません」といわれ、しばらく様子を見て、変化している様子もないがなんとなく気になり、数ヶ月あるいは1～2年おきに自分から受診している者が3人いた。医師より「手術した方がよい」といわれたにもかかわらず、家事が忙しく放置したり、恐しいという気持ちから病院を点々として入院までの期間ののびた者は2人だった。フォローアップしているうちに異常のわかった者は1人で、生検をして異常なしといわれ3～4年たち再び気になり受診した者や、初診と入院時のしこりが同一のものかどうかははっきりしない者が4人いた。

今回の調査は患者の側からの情報のみで、初診時の診断をつかむことはできなかったが、21人中手術を勧められていた2人以外は初診時は悪性ではなかったと考えられる。そしてその中の半数は、「悪性ではありません」「心配いりません」といわれたことで、治療の対象からはずされ健康とみなされたり、治療の必要はあっても悪いものではないという診断から、安心して治療の途中で放置したりしている。このことから、この人達はしこりが今後悪性にかわるかもしれないという考えをなかなか持つことができないのではないかと感じた。そしてそのために、ガンがかなり進行してしまってから次の受療行動をおこなっているのではないかと思われ、そのことに問題があると考えた。

初診時、受診して来た人達が、どのような気持ちで受診したのかや、その時どのような医療機関を選んだのかは、今回はわからなかったが、少なくとも「普通ではない」「このしこりは何なのだろう」といった疑問をいただき受診にふみきったと思われる。しかし、看護師は悪性と診断さ

れた人達へは目を向けるが、異常のなかった者に対しては、ほとんど目を向けることはない。また受診して来た人達も病院は治療の場と考えているのではないだろうか。

今回の調査は、カルテからという限られた情報を元にしており、症状に気づいてから入院までの期間にかかわる要因を知るには充分ではなかった。しかし、この調査結果から、しこりに気づき受診したにもかかわらず、「異常ありません」「悪性ではありません」「乳腺症です」などと言われた人達への看護の必要性というものを感じた。初めは悪性ではないと診断された人達が、長い経過の中で悪性化していることは、今回の調査からもうかがわれた。悪性ではないと診断された人達をそのまま帰すのではなく、看護者は、その人達がどのようにしてしこりなどの症状に気づき、それをどう判断して受診したのか、そして医師の説明をどう受け止めたかなどを知り、その人に必要な援助を考えていく必要がある。その中には、正しい自己検診法の普及や、乳ガンの知識、定期的な検診のすすめなどの保健指導を、看護の一環として行っていく必要を感じた。

〔参考文献〕

1. 小林 隆他監修 現代産婦人科学体系 第11巻 中山書店 1972
2. 西森 聡子・南 裕子 アメリカ留学に得た乳ガンの看護
看護学雑誌 vol.35 No.4 P.82 1971
3. 安住 修三 朝日新聞 1979年11月
4. 田中 恒男・野原 忠博共著 健康と社会講座現代と健康8
大修館書店 1975